



ノーブルス オブリージュ  
*Noblesse oblige*

# 「貴き者の責務」 日本住宅公団初代総裁 加納久朗 第一回

作家 高崎哲郎

昭和30年7月25日、日本住宅公団は設立されました。その初代総裁である加納久朗（明治19年〜昭和38年）が亡くなって、今年でちょうど50年。これに寄せて、彼の生い立ちから数々の功績、総裁時代のエピソードなどを中心に、今月から12回にわたって連載します。

## 序章

「Pro Bono Publico（民衆への無償奉仕）」

漆黒に広がる闇夜に流星のような一閃の光芒が走った。すると亡き父加納久宜の幻影が、あたかもフランスの近代画家ジョルジュ・ルオーが描くうつむく顔面蒼白のキリスト像（「聖顔（La Sainte Face）」）のように浮かび上がった。幻影の久宜は晩年の華族（子爵）の礼服装であった。知性の人であった父は、品位のある細面の顔を緊張させ、ゆっくりとした口調で息子久朗に語りかけた。

「二にも公益事業、二にも公益事業、ただ公益事業に尽せ」

久朗は、それが鹿児島知事など長年公務に携わった父久宜の遺言であることを知っていた。父が近代日本の農政の先駆者であり、



父 加納久宜（加納家蔵）  
最後の一宮藩主、子爵、鹿児島知事などを歴任

い夢であった。彼の人生の行路に多大な影響を与えた2人の故人に、夢の中で再会し得るなどとは思ひもなかったことだった。しかも彼らの人生哲学をあらためて言い聞かされるなどとは…。

「決意と実行の時だ！」。久朗は自己に言い聞かせた。

昭和30年（1955）7月25日午前6時前。

加納久朗は脳裏に残る故人のイメージを振り払うようにベッドから起き上がった。戦前横浜正金銀行（戦後東京銀行を経て現三菱東京UFJ銀行）ロンドン支店長（支配人）時代以来愛用している薄手のガウンを羽織って、寝室の洋風窓の前に立ってニットのカーテンを押し開いた。長かった梅雨もようやく終わり、首都東京の空には真夏のうるんだ群青色が広がっていた。東京都港区赤坂新坂町1番地の加納私邸（現在日カナダ大使館前）は、洋館風の2階建てで、主人久朗の書斎と寝室は2階にあった。庭の木立の緑を抜けて吹いてくる朝風は、すでに熱気を含んでおり、猛暑の陽光が降り注ぐ日になることを伝えていた。この日、日本住宅公団が発足し、彼は初代総裁に就任するのである。

敗戦国・日本の住宅事情は最悪の状況に陥った。米軍機の空襲を受けた全国の都市では、住民の大半が雨露をしのぐのがやっとという掘立小屋の生活を強いられていた。この想像を絶する惨状をどうにかして克服しなければならぬ…。

この朝、秘書役速水雅典には午前7時には

中でも西南の役後の疲弊した鹿児島県を私財も投じて蘇生させた名知事であることは関係者の間に広く知られていた。

Pro Bono Publico.Pro Bono Publico.Pro Bono Publico.

父の言葉を受けて、久朗はラテン語の愛唱句を3度つぶやいた。父の享年は71歳だった。久朗は2年後にその年齢に達する。

父の映像は忽然として消え、眼前に暗闇が広がった。漆黒の闇に再び流星のような光が走った。すると今度は、生涯の信仰の師である内村鑑三\*のモーニングを着た直立姿の幻影が浮かび上がった。内村は右手に聖書を持ち、猫背きみの背筋を伸ばして正面を見つめている。この幻影は、東京帝国大学の学生時代に無教会主義キリスト教指導者内村に巡り合いその教えを生涯の精神の柱に据えることを誓った際、内村から手渡された写真であった。老齢の内村は、ライオンを思わせる人を射抜くような表情にかすかに笑みを浮かべて久朗に声をかけた。

Der Starke ist am machtigsten  
allein Schiller\*  
久朗は「この「ことば」を内村から直接下

公用車で迎えに来るように命じていた。

「発足式は午前9時半からですから、無理をなさらずに8時頃御自宅を出てはいかがですか」

速水は前日加納に伝えた。  
「組織の長は職員よりも早く出社し最後に退社すべきである、と父に教えられたのだ」  
加納は朝7時に迎えに来るようにと念を押した。

太平洋戦争の末期、昭和19年（1944）

11月から米軍機による日本の都市を焼き払う「じゅうたん爆撃」が執拗に繰り返され、20年8月15日の敗戦の日までに全国で119都市が壊滅的な戦災をこうむった。空襲による被害は当時の内務省発表によると、死者24万1000人、負傷者31万3000人、罹災者804万5000人、全焼壊233万3000戸、半焼壊11万1000戸であった。この他に、防空のために行われた建物疎開で60万戸が壊された。戦争中、約300万戸の建物が減少した。敗戦後の全国の住宅不足数は約420万戸と推定された。全国の被災者は「住むに家なく、食うに糧なき」（経済安定本部報告書）惨状であった。

20年11月、幣原内閣のもとで戦争復興院が生れた。日本の主要都市は一望焼け野原となつてわずかに不燃建築の残がいを残すだけとなり、過去の遺産はほとんどなくなっていた。そこに理想的な文化都市を新しく造り出す絶好の機会が来たように見えた。だが敗戦後の虚脱感に襲われていた国民や有識者の中



内村鑑三（内村から加納に贈られた写真のひとつ、一宮町教委「加納家史料」）

\*（1861-1930）キリスト教思想家。日露戦争開戦にあたっては非戦論を唱えた。雑誌「聖書之研究」を創刊。従来の教会的キリスト教に対し無教会主義を主唱。

イツ語で聞かされたのである。

「勇者ハ、独り立ツ時 最モ強シ シラー」

久朗は、内村が伝えたシラーの名句を和訳してつぶやいた。ドイツの18世紀ロマン派（疾風怒濤（シュトウルム・ウント・ドラング）時代）を代表する詩人・劇作家フリードリヒ・フォン・シラーの『箴言集』から引用されたものである。久朗は人生の苦境に立つた際に師の言葉を心に刻んできた。久朗は闇に現われた内村に向かって深くうなずいた。いつの間にか、内村の肖像は闇に消え去った。内村の享年は69歳で、久朗はこの年同年に達するのである。

久朗は夢から覚めた。かつて見たこともな

からは「理想論」は出てこなかった。戦災者の一部はいち早く仮小屋を建て、建築制限を無視した闇市が駅前などに生れ、新しい盛り場が作り出され、ゆがんだ権利関係が根を下ろし始めていた。

23年7月、建設行政の監督官庁として建設省が設置された。それまで日本には建設行政のまとまった監督官庁がなかった。建築許可（認可ではなく）は警察が、建設産業はセメントを使っているからとの理由で商工省窯業課が担当していた。翌24年には建設業法が、さらには25年には建築基準法、建築士法が相次いで制定され、制度面での新しい体制が急速に整備された。

政府は、応急簡易住宅建設、非戦災建物の強制開放、都市への人口流入制限、地代家賃統制令の発令などの緊急措置に迫られた。25年には住宅金融公庫（国民の住宅建設資金の融通を目的とする）が創立され、翌年からは公営住宅法の制定に踏み切った。だがドッジ・ラインによる緊縮財政下では、公営住宅と公庫融資住宅を合わせて年間10万戸にも満たないペースの供給がやっとの状況だった。（加納は助言者としてドッジ・ライン導入に関わった）。民間による建設も一向に進まず、29年になつても全国でなお約280万戸の住宅が不足されているとされた。産業の復興に伴って、人口の都市集中や核家族化現象も重なるようになり、都市の住宅難は最大の社会問題・政治問題のひとつとなっていた。

30年（1955）の「経済白書」は指摘する。「生活の一般水準がほぼ戦前復帰を達成した中であつて、生活の三大要素である住宅面

